バンコク落球ホテル

作＝たいあたり

レックの指が優しく私の玉を包み込み、親指が撫でるようにマッサージする。
そっと玉を掴んだまま、優しくふぐりを引っ張り、揉みしだいていく。
しかしその日はペニスが、なかなか硬くならなかった。
部屋にはバンコクの喧噪が入り込み、蒸し暑い空気をファンがかきまわしている。
「ちんちん、元気ないネ」
レックの甘い声が、耳に絡みつく。

レックに出会ったのは、タイに来て１ヶ月ほど過ぎてからだ。

業績が悪化する一方の会社に嫌気がさし、辞めさせられる前にと自分で辞めたのが半年前。
「もう日本に将来はない、これからはアジアの時代だ。向こうでニュービジネスを起ち上げる」
そんな計画を話すと、両親には勘当だと言われ、友人達にはバカにされた。
５年もつきあっているアケミならわかってくれると思ったのだが、
「日本で使えないヤツが何を出来るっていうの？　こんなバカだとは思わなかった。今までつきあっていて損した」

と言われた。
腹が立って横っ面をはり倒そうとしたら、逆に睾丸を思いきり蹴られた。激痛に声も出せず、地面に突っ伏して吐た。
「役立たず！！」
アケミは捨てぜりふを吐いて去っていった。睾丸は腫れ上がり、痛みは２週間ほど抜けなかった。

「俺をバカにした連中を見返してやる、成功するまで帰らない」
大仰な決意でタイの首都・バンコクに渡ったのは、その１ヶ月後だった。
金蹴りのダメージと渡航の準備の忙しさで、しばらく女にご無沙汰だった私は、景気づけに乗り込んだソープランドで、自分が不能になっていることに気づいた。
アケミの金蹴りで睾丸が傷ついてしまったのか、それとも精神的なものなのか、病院には行かなかったが、何軒もの風俗店で試してみがダメだった。
気分はしぼみ、南国の明るい陽光さえもが疎ましく、酒に浸るようになった。懐具合もも寂しくなって、宿も中華街のはずれの安ホテルに移すようになった。
焦りながらも、無為に過ごす毎日。そんなときホテルの近所のマッサージ屋で、レックに出会ったのだ。

そのマッサージ屋は外国人の入らないような小さな店で、いわゆる風俗店ではないのだが、普通のマッサージをしたあとに、チップを渡すと睾丸マッサージをしてくれる。腰や内蔵に効くとの評判で、チップ次第でヌいてもくれる。
大して期待もせずにマッサージを受けたのだが、レックのマッサージの腕は確かで、体によどんだ毒素が抜けていくようだった。
タイマッサージはけっこう時間がかかる、普通２時間はやってもらうのだが、言葉が通じないとけっこう退屈する。
しかしレックはこのテの店では珍しく、カトコトの日本語を話すことができた。
以前日本人駐在員の愛人をしていて、日本語を覚えたこと。その男は何もいわず日本に帰り連絡もないこと。歳はもうじき３０歳になる、出身はタイ北部の小さな農村だ、などとマッサージの合間に身の上を聞いた。
普通のマッサージが終わったあと、睾丸マッサージを持ちかけられ、「起たないんだよ」と言いながらも、やってもらうことにした。
レックは私を仰向けにすると、足を広げさせてその間に座り、手際よくパンツを脱がした。掌で包むように握られると、睾丸に暖かさが伝わり、疼きを感じた。
痛みを感じる直前の微妙な力加減で、睾丸を親指でマッサージする。そっと玉を掴み、ふぐり

を伸ばしながら精管を指で挟んで揉んでゆく。睾丸に新しい血液が送られていくようだ。
肛門の手前からふぐりの付け根、ペニスの裏を尿道にかけてゆっくりと指圧していく、精管や尿道に詰まっていたものが、押し流されていくような感覚を覚えた。ペニスが熱くなり、包皮に隠れていた亀頭がむき出しになった。
レックの指先が鈴口に触れたとき、予期せぬ絶頂感に襲われ、とめどもなく精液が溢れ出した。
「いっぱいデタね」
とレックが笑顔で拭いてくれた。
私は羞恥心を感じたが勃起は収まらず、頼んでもう２発ほどヌいてもらった。久しぶりの射精で玉も気持ちも軽くなり、多めにチップをはずんで、「また来るよ」といって店を出た。

私はその後、マッサージ屋に毎日のように通い詰めた。レックははじめ「物好きな客」ぐらいに思っていたようだが、そのうちすっかり親しくなった。
店が終わるのを待って屋台で一緒に食事をしたり、休みの日にも会うようになり、ついにはレックも私の部屋で、一緒に暮らすようになった。

「タイの女にはあまり入れ込むなよ、情が深くて優しいが、起こると怖いぞ。浮気なんかバレたらたちまち阿部定だぜ」

あの店を教えてくれた貧乏旅行者が言う。
「何です？　阿部定って？」
「アソコをチョン切られるってことだよ、教養がないねぇ」
レックに限らず、この国の女は情熱的で感情の起伏も大きい。しかし私は彼女の気の強そうな顔も、小柄で引き締まった体も、やや陰のある性格もすべてが気に入ってしまっていた。

レックとの暮らしは平穏で、タイに来てはじめて安らぎをおぼえることができた。しかし心の片隅にはいつも「このままでは帰れない」というプレッシャーがあった。
仕事も探してみたが、タイ語どころかろくに英語も出来ず、３０台半ばで専門技術もないような男に、仕事などあるわけがなかった。
「役立たず！！」
アケミの言葉が私の心に突き刺さる。自分の甘さに嫌気がさした。
焦れば焦るほど何も出来ず、酒に逃げる毎日、日本から持ってきた金も、そんな暮らしのせいでますます心細くなり、今ではレックに食費を頼っている有り様だ。

宿に出入りしているオカマのソムチャイに、
「アンタもオカマになればいいのに」

とからかわれた。
タイにはオカマが多く、ごく普通に街で働いている。ソムチャイは男娼で、英語が流暢なのときれいな顔立ちで、白人相手にいい稼ぎをしているのだ。
私は男に興味はないつもりだが、たしかにホモにモテる。バンコクの飲み屋では何度もマッチョな白人に言い寄られている。
こう金に困ると、いっそホモに体を売るかとも思ってしまう。

仕事も見つからず、だらだらと毎日を過ごしているうちに、私はエリコと知り合った。
エリコは十人並み以下の顔立ちで、気の利かない女だった。日本では声をかけたいとは思わないような相手だが、そのときは何となく日本人が恋しくて声をかけてみた。
エリコは就職難のなかで苦労してＯＬになったものの、会社ではろくな仕事をやらせてもらえず、男にも相手にされなかった。仕事に嫌気がさして、会社を辞めてタイに語学留学することにしたそうだ。しかしこちらでも友達ができず、寂しい思いをしてきたという。
似たような境遇で話が合う上に、エリコは金を持っていた。気前よく日本料理を奢ってくれたし、住んでいるのはエアコン付きのマンションだった。
私は日本の味に飢えていた、そして日本の女にも。エアコンをギンギンに効かした部屋で、私はエリコを抱いた。

エリコは見た目はパッとしないが、肌だけはきれいで、男をろくに知らなかった。ベッドではマグロのように転がるだけだったが、受け身な態度が新鮮だった。

昼間はエリコに付きあって、盛り場などを遊びまわっていたが、夜にはレックの待つ部屋に戻ることが多かった。
レックには相変わらず仕事を探して毎日歩き回っているといってある。疲れているからとセックスもしなくなってきた。

その日、アパートに戻ってきた私に、レックが「マッサージをしてあげる」といってきた。これはご無沙汰になっているセックスをしようという誘いでもある。
その日は昼にエリコを抱いたばかりだった。私はもともと精力の弱い方で２回戦もなかなかできないが、ためらうと浮気を疑われるのではないかと思った。
レックはいつになく積極的で、マッサージにも熱が入っていたが、エリコを抱いたあとではなかなか勃起しない。レックのプライドはいたく傷ついたようだった。

気持ちよさにウトウトしかけたとき、不意に睾丸を握る力が強くなった。私は驚いてレックの顔を見た。

レックは私の目を見つめると、
「アナタ、浮気してる」
といった。
「アナタとニホンジンオンナ、一緒に歩いてる」。
私は焦った。自分で見たのか、人から聞いたのかわからないが、とにかく知られてしまったのだ。あわてて弁解しようと思ったが、レックは聞いてくれなかった。
小声のタイ語で何か言い続けている、私の不実を責めているのだろう。私の睾丸は彼女の掌に握られたままだ。
少しづつ握力が強くなってくる。
「痛い」
思わず口から言葉が出た。
「痛い、いたい、イタイ、イタイ！　イタイ！！」
それしか言葉が出なくなった。
暴れて逃げようと思ったが、それすらもできない。レックのマッサージで鍛えた、たくましい指が、万力のように睾丸をくわえ込んでいるのだ。
ぐちゃりといやな感触がして、ついに左の玉が潰れた。内蔵が掻き回されるような酷い激痛。吐き気を催し、吐瀉物で息が詰まった。しかし、レックの指の力は弛まない、右の玉だけでなく、

すでに潰れた左の玉にも容赦なく指を喰い込ませる。
「サヨナラ……」
混濁する意識の中で、レックの声を聞いた。そして右の睾丸が潰れる感触とともに、意識を失った。
気がつくと私は病院のベッドにいた、麻酔のもやを通して、股間から鈍い痛みが伝わってくる。包帯の上からふれてみて、性器が丸ごと無くなっているらしいことがわかった。
「もう、立って小便をすることも、できないのか」
そんなことを思うと、やり場のない喪失感に襲われたが、不思議とレックへの怒りはわいてこなかった。
私を病院に運んでくれたのは、オカマのソムチャイと、ホテルの従業員達だった。窒息と失血でかなり危ないところだったという。レックは私が気を失ったあと、刃物で性器を根元から切り取り、それを持って逃げたのだそうだ。
実は私の浮気はホテルの従業員の間で評判になっていて、皆いつかこんな事態になると思っていたそうだ。
レックは街から姿を消した、たぶん実家にでも帰ったのだろう。誰もレックの実家を知らなか

ったし、私自身レックの本名すら知らなかったことに、初めて気づいた。
「あのニホンオンナ、最近フランス人とつきあってるわよ」
エリコのことを聞くと、ソムチャイがそう教えてくれた。ヒッピーまがいの連中と、毎日街で遊んでいるそうだ。
もう、エリコに会いたいという気もおきなかった。

睾丸を失ってから、私は奇妙な安堵感を感じるようになった。男らしく生きるというプレッシャーから、解放されたせいかも知れない。
残り少ないわずかな金は、治療費に消えた。もう日本に戻るしかないのだが、なぜか帰りたいという気もおきなかった。
「いっそのことアンタもオカマになったら？　アタシがいろいろ教えたげるわヨ」
ソムチャイが明るく笑う。
「それもいいかな……」

今、私は眩暈（めまい）がするほど自由だった。